字音形態素「チュウ(中)」と「ジュウ(中)」の関係について

鈴　木　　豊*

［キーワード］連濁　接尾語　語頭濁音語　二重語　現代仮名遣い

［要旨］現代語に於ける字音形態素「チュウ（中)」と「ジュウ（中)」の関係は、通常の字音形態素（撥音の後でのみ連濁形をとることがある）とは異なり、前者が「範囲内」後者が「範囲全体」という意味上の対立が清音形「チュウ（中)」と濁音形「ジュウ（中)」に対応するという特殊なものである。諸資料に見られる「中」を後部成素とする複合語の用例を検討した結果、このような特殊な対立はおおむね以下のような過程を経て確立したことが明らかとなった。

Ⅰ期（奈良～平安時代)「キョウジュウ（京中)」などの語に新濁が生じた。

Ⅱ期（鎌倉～室町)「キョウジュウ（京中)」からの類推（「ジュウ」は場所を表す語に接続する）で前部成素末が鼻音ではない「ゴショジュウ（御所中)」などが生じ、さらに和語「シマジュウ(島中)」「カマクラジュウ(鎌倉中)」などが生じた。また「ソウジュウ(僧中)」などへの類推（仲間内であること表す）から「シンルイジュウ（親類中)」などが生じた。

Ⅲ期（江戸～明治初期）さらに前接語の範囲を広げた。また「シンジュウ（心中)」などように連濁形が特別な意味をもったためにそれまで連濁していた通常の意味を表す語形が非連濁化する例が生まれた。

Ⅳ期（明治中期～現代)。「クウジュウ（空中)」などの新濁（鼻音後の濁音化）が減少した。また「チュウ（中)」が範囲内、「ジュウ（中)」が範囲全体という意味を担うようになり、語義の分化が完全に語形の違いに対応するようになった。

清濁を異にする二重語形が意味の分化に関与する例は和語には多数の例を見出すことができるが、字音形態素には例が少なく、和語に見られた関係が字音形態素にも及びはじめたことを示す稀少例として、言語史研究上の価値は大きいと考える。

＊教授／日本語学

1.　はじめに

1.1　現代語としての基本的語義

現代語の「チュウ（中）」:「ジュウ（中）」の関係は意味の上で「範囲内」:「範囲全体」の対立の関係になっている。これは通常の字音形態素における連濁形：非連濁形の対立とは全く異なった関係である。

現代語の「チュウ（中）」と「ジュウ（中）」の主要な意味について『明鏡国語辞典』（大修館書店　2002年刊）には以下のように記されている（ここでは派生語内部において後部成素となる場合の意味に限って引用する）。

Ⅰ「チュウ（中）」

(1) ある範囲のうちであること。「車—・暑—・忙—・空気—」「不幸—の幸い」「四月—に返事をします」

(2) それが行われている時・状態であること。「会議—・準備—・仕事—」「お話—（に）申し訳ございません」

(3) 仲間うち。「家—・社—」

Ⅱ「ジュウ（中）」

(1) ある範囲の全体。すべてにわたって。「家—が大騒ぎだ」「体—に湿疹（しっしん）が出る」「豆をそこら—にばらまく」

(2) その期間のうちずっと。「一日—遊ぶ」「年—忙しい」

(3)《「…に」の形で》その期間内に。それを期限として。「今日—に仕上げる」

＊「本年 [二〇〇三年度･二、三日] 中に」など、「じゅう / ちゅう」とも言えるものもある。

(4) 仲間うち。「講—・連—（れんじゅう）・（れんちゅう）」

※「講中（こうじゅう）」「連中（れんじゅう）」「心中（しんじゅう）」「老中（ろうじゅう）」「輪中（わじゅう）」「一年中（いちねんじゅう）」など、「じゅう」となるものは、現代仮名遣いでは「ぢゅう」も許容。

上記のうちⅠ(3)、Ⅱ(3)(4) をやや特殊な意味と見れば「チュウ（中）」の主要な意味ははA.範囲内であること、B.進行中であること、「ジュウ（中）」の主要な意味はC.範囲全体であること、となる。つまり現代語において「チュウ（中）」と「ジュウ（中）」は概略以下のような対応関係を示している。

表1　現代語における「チュウ（中）」と「ジュウ（中）」の関係

語形＼意味	範囲内	範囲全体	進行中	備　　考
「チュウ（中）」	○	×	○	原則として漢語に接続する
「ジュウ（中）」	×	○	×	どの語種の語にも接続する

1.2　「チュウ（中）」と「ジュウ（中）」の関係の特殊性

一般に字音形態素を含む漢語は連濁を起こさないが、例外的に撥音の後で連濁することがある。その例として「サンボン（三本）」「シンジン（信心）」など多数の語をあげることができるが、一方で「ヨンホン（四本）」「ホンシン（本心）」などの例外もまた多数存在し、「漢語は撥音の後で連濁する」という連濁規則が完全ではないことを示している。字音形態素の連濁／非連濁の実体をもう少し詳しく見てみよう。たとえば「ホン（本）」を後部成素とする派生語は『日本国語大辞典 第２版』（以下『日国2』と略称する）に595語あり、そのうち「-ホン」304例「-ボン」221例「ポン」70例である。連濁形（221語）を総計（595語）で割ると約37％となる（これを「連濁率」と呼ぶことにする）。『日国2』の見出し語として100語以上の派生語がある字音形態素の連濁率を調査した結果、全152語中121語の連濁率が0～10％の範囲内に収まった（鈴木豊（2013）表1参照）。和語の場合は一般に60％以上の連濁率なので漢語の連濁率は著しく低いことになる。字音形態素中最も多くの派生語をもつ「シャ（者）」の連濁率は10％（2227語中219語が連濁形をとる）だが連濁形は撥音あるいは古く鼻音であった音節（現代語では「う」や「い」で表記される）に接続する場合に限られている。「ホン（本）」は書籍の意味の場合に連濁する（たとえば「ブンコボン（文庫本）」）ので連濁率が高くなっている。「サン（山）」のように普通名詞と固有名詞（人名）は連濁し、固有名詞（山名）は非連濁形をとるものもある（連濁形399語／総計605語で連濁率は66％　鈴木豊（2013）参照）。「チュウ（中）」（現代仮名遣いでは濁音形を「ジュウ（中）」と表記する。『日国2』では「じゅう」で独立見出し）の場合は「チュウ」446語、「ジュウ」109語で仮に連濁率を算出すると109／555＝約20％ということになる。

このように「チュウ（中）」と「ジュウ（中）」は意味の違いによって区別されているのであり、一般の字音形態素が撥音という音声的環境との関連で連濁形をとっているのと大きく異なっている。

この研究の目的は「チュウ（中）」と「ジュウ（中）」の歴史的変遷を跡づけることにより、現代語のなかで特異な用法をもつに至った理由を明らかにすることにある。

2.　研究史

現代語の「チュウ（中）」と「ジュウ（中）」の研究は主として両者がどのような意味領域の語に接続するのか、その違いを明らかにすることを中心に進められてきた。先行研究にはウィンター（山崎）良子（1973）・柏野健次（1979）・水野善道（1984）・吉田奈保（1994）・大和田栄（1997）・文應喆（2000）・丹保健一（2001）・丹保健一（2002）・小柳昇（2010）などがある。これらの研究ではその目的が主として現代語の意味論的研究であるために連濁現象に関する言及はごくわずかである（「ジュウ（中）」が古代の新濁起源であることの指摘にとどまる）。

現代語における「チュウ（中）」と「ジュウ（中）」の関係は、連濁現象という観点から見る

と特異なものである。そこでこの研究では字音形態素としての「チュウ（中）」がどのような事情で現代語のような特異な性質をもつにいたったのかを明らかにすることを目的とする。なお字音語の連濁については奥村三雄（1952）・福永静哉（1955）（1959）・小林芳規（1970）などがあり、字音語の連濁の豊富な実例が引用されている。その中には「チュウ（中）」を後部成素とする派生語の連濁例も含まれており、それらを参考にした。

なお「現代かなづかい」（1946年）「現代仮名遣い」（1981年）では四つ仮名の仮名遣いに関する規則が定められている。その中で特に「世界中」の「中」は「じゅう」とする（現代仮名遣いでは「ぢゅう」も許容）の仮名遣いについては異論もあるところである。また「改訂常用漢字表」（2010年）では「中」の音に「ジュウ」が加えられた。これは「現代仮名遣い」で「せかいじゅう」と表記された語を「世界中」と漢字表記しすることに理論的根拠を与えるための措置と考えられる。このように字音形態素「チュウ（中）」は現代仮名遣いを決定することが困難な語として扱われてきた経緯がある。よって「中」を「じゅう」と表記することの意味についても触れる。

3. 「チュウ（中）」から「ジュウ（中）」へ

3.1　概観

現代語では接尾語と扱われることの多い「ジュウ（中）」はいかにして成立したのだろうか。まず『日国2』の見出し語の中から、「ジュウ（中）」を後部成素とするものについて検討することにする。表2は『日国2』における「－ジュウ（中）」を後部成素とする全ての語を用例の古い順に配列し、新たに拍数・語種情報を加えたものである。

このうち特に注目すべきは「キョウジュウ（京中）」である。「京中」はおそらく連濁形あることにより場所を表す接尾語と認識されるようになり後に「シマジュウ（島中）」（『天草版伊曽保物語』・『日葡辞書』）などの和語が「ジュウ（中）」に下接することの契機となったのだろう。『平家物語』『曽我物語』『太平記』に見られる「カマクラジュウ（鎌倉中）」は『日国2』の見出しにはないが同様の例と考えてよいだろう。また、「キョウジュウ（京中）」の用例では単に範囲内ではなく範囲全体を表しているものが多い（たとえば『岩波古語辞典 第二版』では『平家物語』の例をあげる）。「範囲内」と「範囲全体」の意味の分化が明確になるのは近代以降と考えられるが、分化の基盤はすでに「京中」の用法に内包されていたといえよう。一方、「チュウ（中）」は接続できる語が字音語に限られている。意義の分化はいまだ明確ではないが、接続面の違いをもって接尾語「ジュウ（中）」が成立したと見ることができよう。

表2　『日本国語大辞典　第2版』における「ジュウ（中）」を後部成素とする派生語一覧

見出し語	漢字表記	用例出典	成立年	成立年備考	前部成素	拍数	語種	末拍	備考
8c									
きょう - じゅう	京中	万葉	750	8c後	きょう	2	漢	う	
9c									
ねん - じゅう	年中	皇太神宮儀式帳	804		ねん	2	漢	ん	
そう - じゅう	僧中	続日本後紀 - 嘉祥二年	849		そう	2	漢	う	
12c									
しょう - じゅう	生中	江談抄	1111	頃	しょう	2	漢	う	
くに - じゅう	国中	康頼宝物集	1179	頃	くに	2	和	に	「コクチュウ（国中）」か
13c									
ちょさく-ろうじゅう	著作郎中	拾芥抄	1200	13～14c	ろう	2	漢	う	
いん - じゅう	院中	平治	1220	頃か	いん	2	漢	ん	
にん - じゅう	人中	海道記	1223	頃	にん	2	漢	ん	
14c									
あん - じゅう	案中	金沢文庫古文書 -（年未詳）	1336	室町前期	あん	2	漢	ん	
15c									
いちねん - じゅう	一年中	風姿花伝	1400	～02頃	いちねん	4	漢	ん	
そう - じゅう	総中・惣中	文明本節用集	1450	室町中期	そう	2	漢	う	
ほう - じゅう	法中	大乗院寺社雑事記 - 応仁元年	1467		ほう	2	漢	ん	
16c									
しんるい - じゅう	親類中	足利本論語抄	1500	16c	しんるい	4	漢	い	
うつろ - じゅう	洞中	言継卿記 - 天文四年	1535		うつろ	3	和	ろ	
ひ - じゅう	日中	バレト写本	1591		ひ	1	和	ひ	
れん - じゅう	連中	鹿苑日録 - 慶長四年	1599		れん	2	漢	ん	
ざいせ - じゅう	在世中	どちりなきりしたん（1600年版）	1600		ざいせ	3	漢	せ	
17c									
ちょう - じゅう	町中	日葡辞書	1603	～04	ちょう	2	漢	う	
ざいしょ - じゅう	在所中	日葡辞書	1603	～04	ざいしょ	3	漢	しょ	
この - じゅう	此中	日葡辞書	1603	～04	この	2	和	の	
しま - じゅう	島中	日葡辞書	1603	～04	しま	2	和	ま	『天草本伊曽保物語』
つき - じゅう	月中	日葡辞書	1603	～04	つき	2	和	き	
ふゆ - じゅう	冬中	御伽草子・猫の草紙	1603	江戸初期	ふゆ	2	和	ゆ	
む - しんじゅう	無心中	評判記・寝物語	1656		しん	2	漢	ん	
わ - じゅう	輪中	尾張藩武家命令究事 - 留書方日帳・寛文六年	1666		わ	1	漢	わ	
いちもん - じゅう	一門中	狂歌・後撰夷曲集	1672		いちもん	4	漢	ん	
ねんぶつ - こうじゅう	念仏講中	俳諧・大坂独吟集	1675		こう	2	漢	う	
くみ - じゅう	組中	俳諧・談林十百韻	1675		くみ	2	和	み	
しん - じゅう	心中	仮名草子・都風俗鑑	1681		しん	2	漢	ん	
しゅく - じゅう	宿中	浮世草子・西鶴諸国はなし	1685		しゅく	2	漢	く	
ぶ - しんじゅう	不心中	浮世草子・男色十寸鏡	1687		しん	2	漢	ん	
わか - ろうじゅう	若老中	浮世草子・新可笑記	1688		ろう	2	漢	う	
こう - じゅう	講中	浮世草子・本朝桜陰比事	1689		こう	2	漢	う	
よ - じゅう	夜中	咄本・軽口露がはなし	1691		よ	1	和	よ	
むら - じゅう	村中	咄本・軽口露がはなし	1691		むら	2	和	ら	

見出し語	漢字表記	用例出典	成立年	成立年備考	前部成素	拍数	語種	末拍	備考
はる - じゅう	春中	浮世草子・西鶴織留	1694		はる	2	和	る	
くるわ - じゅう	郭中	浮世草子・好色万金丹	1694		くるわ	3	和	わ	
こがね - しんじゅう	黄金心中	浄瑠璃・忠臣身替物語	1699		しん	2	漢	ん	
まち - じゅう	町中	狂言記・六地蔵	1700		まち	2	和	ち	
18c									
そねざきしんじゅう	曾根崎心中	近松門左衛門作	1703	初演	しん	2	漢	ん	
すけろく - しんじゅう	助六心中	宝永年間初年の心中事件	1704	～11	しん	2	漢	ん	
いまみやのしんじゅう	今宮心中	近松門左衛門作	1711	頃初演	しん	2	漢	ん	
しょう - じゅう	荘中・庄中	雑俳・智恵車	1716	～36	しょう	2	漢	う	
どうぐや - しんじゅう	道具屋心中	浮世草子・世間娘容気	1717		しん	2	漢	ん	
せかい - じゅう	世界中	浄瑠璃・博多小女郎波枕	1718		せかい	3	漢	い	
だいもくこう - じゅう	題目講中	浮世草子・浮世親仁形気	1720		こう	2	漢	う	
かろう - じゅう	家老中	歌舞伎・幼稚子敵討	1753		かろう	3	漢	う	
さぶらい - じゅう	侍中	歌舞伎・幼稚子敵討	1753		さぶらい	4	和	い	
そこら - じゅう	其処等中	洒落本・水月ものはなし	1758		そこら	3	和	ら	
おく - じゅう	奥中	雑俳・柳多留 - 七	1772		おく	2	漢	く	
うち - じゅう	家中	雑俳・柳多留 - 七	1772		うち	2	和	ち	
しゃば - じゅう	娑婆中	雑俳・柳多留 - 八	1773		しゃば	2	漢	ば	
そこいら - じゅう	其処等中	洒落本・甲駅新話	1775		そこいら	4	和	い	
みなげ - しんじゅう	身投心中	歌舞伎・天満宮菜種御供	1777		しん	2	漢	ん	
からだ - じゅう	身体中	咄本・鯛の味噌津	1779		からだ	3	和	だ	
くび - れんじゅう	首連中	洒落本・六丁一里	1782		れん	2	漢	ん	
てうち - れんじゅう	手打連中	狂歌・徳和歌後万載集	1785		れん	2	漢	ん	
こん - じゅう	此中	洒落本・通言総籬	1787		こん	2	和	ん	
つりがね - こうじゅう	釣鐘講中	歌舞伎・傾情吾嬬鑑	1788		こう	2	漢	う	
いつか - じゅう	何時中	洒落本・傾城買四十八手	1790		いつか	3	和	か	
にほん - じゅう	日本中	地方凡例録	1794		にほん	3	漢	ん	
うがち - れんじゅう	穿連中	咄本・臍が茶	1797		れん	2	漢	ん	
おおて - れんじゅう	大手連中	洒落本・十界和尚話	1798		れん	2	漢	ん	
19c									
つぼね - じゅう	局中	歌舞伎・名歌徳三舛玉垣	1801		つぼね	3	和	ね	
このごろ - じゅう	此頃中	洒落本・三躰誌	1802		このごろ	4	和	ろ	
わかいもの - じゅう	若者中	滑稽本・戯場粋言幕の外	1806		わかいもの	5	和	の	
かお - じゅう	顔中	滑稽本・浮世風呂	1809	～13	かお	2	和	お	
ことし - じゅう	今年中	滑稽本・浮世風呂	1809	～13	ことし	3	和	し	
やうち - じゅう	家内中	滑稽本・浮世風呂	1809	～13	やうち	3	和	ち	
かない - じゅう	家内中	滑稽本・浮世床	1813	～13	かない	3	漢	い	
せけん - じゅう	世間中	滑稽本・浮世床	1813	～13	せけん	3	漢	ん	
おしうり - しんじゅう	押売心中	歌舞伎・四天王産湯玉川	1818		しん	2	漢	ん	
ねんがら - ねんじゅう	年年中	人情本・契情肝粒志	1825	～27	ねん	2	漢	ん	
ねんびゃく - ねんじゅう	年百年中	人情本・契情肝粒志	1825	～27	ねん	2	漢	ん	
まおとこ - しんじゅう	間男心中	歌舞伎・東海道四谷怪談	1825		しん	2	漢	ん	
こないだ - じゅう	此間中	人情本・英対暖語	1838		こないだ	4	和	だ	
ろう - じゅう	老中	武家名目抄	1850	19c 中頃か	ろう	2	漢	う	
ねんが - ねんじゅう	年年中	歌舞伎･与話情浮名横櫛（切られ与三）	1853		ねん	2	漢	ん	
かわ - じゅう	側中	歌舞伎･青砥稿花紅彩画（白浪五人男）	1862		かわ	2	和	わ	
なつ - じゅう	夏中	内地雑居未来之夢	1886		なつ	2	和	つ	

見出し語	漢字表記	用例出典	成立年	成立年備考	前部成素	拍数	語種	末拍	備考
むり - しんじゅう	無理心中	艶魔伝	1891		しん	2	漢	ん	
いまどしんじゅう	今戸心中	広津柳浪作。	1896	発表	しん	2	漢	ん	
にっぽん - じゅう	日本中	唱歌・おつきさま	1900		にっぽん	4	漢	ん	
20c									
さきごろ - じゅう	先頃中	良人の自白	1904	～06	さきごろ	4	和	ろ	
あたま - じゅう	頭中	吾輩は猫である	1905	～06	あたま	3	和	ま	
さきだって - じゅう	先立中	吾輩は猫である	1905	～06	さきだって	5	和	て	
せんだって - じゅう	先達中	吾輩は猫である	1905	～06	せんだって	5	和	て	
いえじゅう	家中	カズイスチカ	1911		いえ	2	和	え	
うじこ - じゅう	氏子中	東京年中行事	1911		うじこ	3	和	こ	
とりべやましんじゅう	鳥辺山心中		1915	初演	しん	2	漢	ん	
たい - じゅう	体中	川のほとり	1925		たい	2	漢	い	
にわ - じゅう	庭中	痴情	1926		にわ	2	和	わ	
あとおい - しんじゅう	後追心中	遠方の人	1941		しん	2	漢	ん	
用例なし									
き - じゅう	羇中	用例なし	＊		き	1	漢	き	
く - じゅう	口中	用例なし	＊		く	1	漢	く	
しゅ - じゅう	衆中	用例なし	＊		しゅ	1	漢	しゅ	
いくたましんじゅう	生玉心中	用例なし	＊		しん	2	漢	ん	
しながわしんじゅう	品川心中	用例なし	＊		しん	2	漢	ん	
だきあい - しんじゅう	抱合心中	用例なし	＊		しん	2	漢	ん	
にん - じゅう	任中	用例なし	＊		にん	2	漢	ん	
もん - じゅう	門中	用例なし	＊		もん	2	漢	ん	
らく - じゅう	洛中	用例なし	＊		らく	2	漢	く	
ひがな - ひじゅう	日日中	用例なし	＊		ひ	1	和	ひ	
よんがら - よじゅう	夜夜中	用例なし	＊		よ	1	和	よ	
くち - じゅう	口中	用例なし	＊		くち	2	和	ち	
このじゅう＃	此中	用例なし	＊		この	2	和	の	
さむらい - じゅう	侍中	用例なし	＊		さむらい	4	和	い	
ひひてえ - じゅう	日一日中	用例なし	＊		ひひてえ	4	和	え	
じゅう	中	用例なし	＊			0			

3.2　平安～江戸時代の変化

本来字音語にだけ接続し、例外的に鼻音の後で連濁（新濁）を起こしていた「チュウ（中）」がどのようにしてそれ以外の語に接続するようになったのだろうか。「チュウ（中）」を含む字音形態素の連濁に関する先行研究のうち奥村三雄（1952）（1959）・福永静哉（1955）・同（1959）・小林芳規（1970）によってその歴史的変遷の概略を以下にまとめる。

福永静哉（1955）は「仏説無量寿経」上巻の連濁例について、当該資料では「連濁する漢字の前の韻は後述する僅少の例外の他はすべて[m][n][ŋ]の三種のいずれかの韻に属するものである」という。「中」字を後部成素とする派生語に濁声点が加えられたのは以下の全４例である。

「人中」<○去>　「宮中」<○去>　「空中」<○去>　「大衆中」<○○去>

このうち「人」が[n]韻尾を「宮」「空」「衆」が[ŋ]韻尾を持つ字である。

福永静哉（1959）は親鸞自筆『観無量寿経集註』・『阿弥陀経集註』（鎌倉時代写）と玄智校点本『浄土三部経』（江戸中期刊）の字音の連濁の変遷について考察したものである。親鸞・

玄智いずれも連濁する例として「空中」（4例）「音中」「光中」「山中」「想中」「人中」「身中」があげられている。そしてすべての連濁例を比較したうえで「こうして時代が平安時代から下るにつれて、必ずしも鼻音の後で連濁しないものも出来るし、また鼻音でない「イ、ウ」などの母音の後でも連濁するものが多くなっているのである」と結論している。

小林芳規（1970）は院政・鎌倉期の訓点資料を博捜し多数の字音の連濁例を示しているが、その中で「チュウ（中）」を後部成素とするものは以下の通りである。

「聖衆来迎寺蔵妙法蓮華経」八軸（院政期書写、鎌倉極初期と目せられる仮名と声点を付す）「山中」＜上上双＞「大衆中」＜平双平上双＞「衆中」＜○上双＞「虚空中」＜去上上双＞「心中」＜去上双＞

書陵部蔵大方仏華厳経巻第四十寿永2（1182）点　「人中」＜去上双＞

板東本教行信証親鸞自筆草稿本（声点は1263以前と推定）「現身中」＜平双上双上双＞

東大寺図書館蔵春華秋月抄巻五延応元年（1239）年記「心中」＜去上双＞「任中」＜平上双＞

この時期の字音の連濁がどのような条件で起きるのかについて小林（1970）は「字音の連濁は鼻音に後位するものが原則で大部分である。特に院政期にはこの類が主なものである。しかし鎌倉時代前後からは、蟹摂・効摂・流摂など母音[i][u]となるものを始め、中期頃には遇摂・止摂の字音の後にも生じ、後期の資料には入声音の後にも起こっている例がある」と結論する。

以上のように、「チュウ（中）」を後部成素とする派生語は鎌倉時代になって鼻音韻尾以外でも連濁をとる例が見られるようになったことが知られる。

次に室町時代から明治に至るまでの資料で「チュウ（中）」がどのように連濁を起こしているのかについて見てみよう。

以下に山田潔（1998）によって『日葡辞書』の見出し語から後部成素に「ジュウ（中）」と「チュウ（中）」をもつ派生語を抜き出し、前代（鎌倉時代）までの意味・用法とどのような違いがあるのかを見てみよう。

表３　『日葡辞書』における「ージュウ（中）」

「※」は「う」表記以外の非鼻音

見出し語	漢字表記	備　考	前部成素	拍数	語種	末拍	鼻音／非鼻音
くうじゅう	空中		くう	2	漢	う	鼻音
そうじゅう	惣中		そう	2	漢	う	鼻音
ふうじゅう	風中		ふう	2	漢	う	鼻音
ぼうじゅう	坊中		ぼう	2	漢	う	鼻音
きょうじゅう	京中		きょう	2	漢	う	鼻音
ちょうじゅう	町中		ちょう	2	漢	う	鼻音
ろうじゅう	老中		ろう	2	漢	う	鼻音
つきじゅう	月中		つき	2	和	き	※

見出し語	漢字表記	備　考	前部成素	拍数	語種	末拍	鼻音／非鼻音
ざいせじゅう	在世中		ざいせ	3	漢	せ	※
こんにちじゅう	今日中		こんにち	4	漢	ち	※
このじゅう	此中		この	2	和	の	※
ひじゅう	日中		ひ	1	和	ひ	※
しまじゅう	島中		しま	2	和	ま	※
しゅじゅう	衆中		しゅ	1	漢	しゅ	※
ざいしょじゅう	在所中		ざいしょ	3	漢	しょ	※
あんじゅう	案中		あん	2	漢	ん	
あんじゅう	闇中	「あんちゅう」も	あん	2	漢	ん	
かんじゅう	寒中		かん	2	漢	ん	
しんじゅう	心中		しん	2	漢	ん	
にんじゅう	人中		にん	2	漢	ん	
ねんじゅう	年中		ねん	2	漢	ん	
もんじゅう	門中		もん	2	漢	ん	
らんじゅう	乱中		らん	2	漢	ん	

表４　『日葡辞書』における「ーチュウ（中）」

見出し語	漢字表記	備　　考	前部成素	拍数	語種	末拍	鼻音／非鼻音
かいちゅう	海中		かい	2	漢	い	
かいちゅう	懐中		かい	2	漢	い	
がいちゅう	街中		がい	2	漢	い	
じゅうにちゅう	十二街中		じゅうに	3	漢	に	
さいちゅう	最中		さい	2	漢	い	
まっさいちゅう	真最中		さい	2	漢	い	
すいちゅう	水中		すい	2	漢	い	
すいちゅう	睡中		すい	2	漢	い	
ていちゅう	庭中		てい	2	漢	い	
でいちゅう	泥中		でい	2	漢	い	
はいちゅう	杯中		はい	2	漢	い	
うちゅう	雨中		う	1	漢	う	非鼻音
こうちゅう	口中		こう	2	漢	う	非鼻音
こうちゅう	光中		こう	2	漢	う	鼻音
そうちゅう	草中		そう	2	漢	う	非鼻音
どうちゅう	堂中		どう	2	漢	う	鼻音
どうちゅう	道中		どう	2	漢	う	非鼻音
きゅうちゅう	宮中		きゅう	2	漢	う	鼻音
ようちゅう	よう中	ママ	よう	2	漢?	う	

見出し語	漢字表記	備　　考	前部成素	拍数	語種	末拍	鼻音／非鼻音
ようちゅう	陽中		よう	2	漢	う	鼻音
きょうちゅう	鏡中		きょう	2	漢	う	鼻音
きょうちゅう	胸中		きょう	2	漢	う	鼻音
きょうちゅう	胸中	上とは綴りが異なる	きょう	2	漢	う	鼻音
しょうちゅう	掌中		しょう	2	漢	う	鼻音
じょうちゅう	城中		じょう	2	漢	う	鼻音
びょうちゅう	病中		びょう	2	漢	う	鼻音
りょうちゅう	領中	「または、りようない（領内）」	りょう	2	漢	う	鼻音
ろうちゅう	楼中		ろう	2	漢	う	非鼻音
ろうちゅう	籠中		ろう	2	漢	う	鼻音
かちゅう	家中		か	1	漢	か	
かちゅう	火中		か	1	漢	か	
かちゅう	花中		か	1	漢	か	
こくちゅう	国中		こく	2	漢	く	
ふくちゅう	腹中		ふく	2	漢	く	
しゃくちゅう	尺中		しゃく	2	漢	く	
きょくちゅう	局中		きょく	2	漢	く	
ぎょくちゅう	玉中		ぎょく	2	漢	く	
しょくちゅう	食中		しょく	2	漢	く	
らくちゅう	洛中		らく	2	漢	く	
けちゅう	家中		け	1	漢	け	
げちゅう	夏中		げ	1	漢	げ	
こちゅう	壺中・籠中		こ	1	漢	こ	
ざちゅう	座中		ざ	1	漢	ざ	
しちゅう	市中		し	1	漢	し	
じちゅう	地中		じ	1	漢	じ	
じちゅう	寺中		じ	1	漢	じ	
じゅうにじちゅう	十二時中		じゅうにじ	4	漢	じ	
ちちゅう	池中		ち	1	漢	ち	
くっちゅう	窟中		くっ	2	漢	っ	
せっちゅう	折中		せっ	2	科	っ	
せっちゅう	雪中		せっ	2	漢	っ	
にっちゅう	日中		にっ	2	漢	っ	
とちゅう	途中	「または、とちゅうに（途中に）」	と	1	漢	と	
どちゅう	土中		ど	1	漢	ど	
にちゅう	耳中		に	1	漢	に	
ふちゅう	府中		ふ	1	漢	ふ	

見出し語	漢字表記	備　　考	前部成素	拍数	語種	末拍	鼻音／非鼻音
むちゅう	夢中		む	1	漢	む	
やちゅう	夜中		や	1	漢	や	
やちゅう	屋中		や	1	漢	や	
やちゅう	野中		や	1	漢	や	
しゃちゅう	砂中		しゃ	1	漢	しゃ	
しょちゅう	書中		しょ	1	漢	しょ	
じょちゅう	女中		じょ	1	漢	じょ	
ろちゅう	路中		ろ	1	漢	ろ	
あんちゅう	闇中	「あんじゅう」も	あん	2	漢	ん	
あんちゅう	庵中	「または、あんじゅう（庵中）」	あん	2	漢	ん	
いんちゅう	院中		いん	2	漢	ん	
うんちゅう	雲中		うん	2	漢	ん	
えんちゅう	淵中		えん	2	漢	ん	
えんちゅう	煙中		えん	2	漢	ん	
かんちゅう	寒中		かん	2	漢	ん	
かんちゅう	棺中		かん	2	漢	ん	
がんちゅう	眼中		がん	2	漢	ん	
きんちゅう	禁中		きん	2	漢	ん	
ぐんちゅう	軍中		ぐん	2	漢	ん	
ぐんちゅう	郡中		ぐん	2	漢	ん	
ごんちゅう	言中		ごん	2	漢	ん	
さんちゅう	山中		さん	2	漢	ん	
じんちゅう	陣中		じん	2	漢	ん	
せんちゅう	船中		せん	2	漢	ん	
てんちゅう	殿中		てん	2	漢	ん	
りんちゅう	林中		りん	2	漢	ん	
れんちゅう	簾中		れん	2	漢	ん	
ごれんちゅう	御簾中		ごれん	3	漢	ん	

表3から「ジュウ（中）」では「和語」かつ前部成素末拍が「鼻音」以外の語に接続する例が生じていることを知ることが出来る。

『蜆縮涼鼓集』（1695年刊）では「中」に「ぢう」の振り仮名を付してある語として「人中」「年中行事」「點心中」「老中」「心中（身中も）」「宮中（くぢう）」「案中」「此中（このぢう）」がある。また、現代では非連濁形となっている語で連濁しているものとして「講師」「高声」「孟子」「普通」「養子」「紛失」など多くの語がある。

4.　清濁の対立による語義の分化

4.1　明治初期における「世界中」の用法

表５　福沢諭吉著作における「世界中」の読みと意味

慶應義塾大学Digital Gallery of Rare Books & Special Collections「デジタルで読む福澤諭吉の」デジタル化されたテキストにより「世界中」をキーワードに含む用例を検索した。

凡例　書名・刊行年に続いて以下の通り表記と意味を区別して用例数を示した。
表記：「ちう」「ぢう」「ルビなし」「その他」の四種類を区別した。「その他」はルビがあるものの印刷が不分明で濁点の有無が明確でないものなど。なお各著作中で例数が０の表記は省略した。
意味：「中」…世界のなかでの意味。「世界中一番高い」のように助詞を介さない例に限った。
「全」…世界のすべての意味。上記「中」以外のすべての例。

書名	刊行年	表記	中	全	計	総	備　考
西洋事情	1866（慶応２）	ちう	0	0	0	25	
		ぢう	0	0	0		
		ルビなし	6	19	25		
		その他	0	0	0		
西洋旅案内	1867（慶應３）	ちう	9	1	10	18	
		ぢう	7	1	8		
條約十一國記	1867（慶應３）	ぢう	0	5	5	10	
		その他	3	2	5		
訓蒙窮理圖解	1868（明治元）	ちう	1	4	5	8	
		ぢう	0	3	3		
洋兵明鑑	1869（明治２）	ルビなし	0	2	2	2	
掌中萬國一覧	1869（明治２）	ルビなし	3	7	10	10	
英國議事院談	1869（明治２）	ぢう	1	0	1	1	
世界国盡	1869（明治２）	ちう	3	9	12	16	
		ぢう	2	1	3		本文１例（中）
		ルビなし	0	1	1		本文１例（全）
啓蒙手習の文	1871（明治４）	ルビなし	0	1	1	1	
學問ノスヽメ　初編～17編	1872（明治５） 1876（明治９）	ルビなし	2	7	9	9	
童蒙をしへ草	1872（明治５）	ちう	0	1	1	9	
		ぢう	0	7	7		
		その他	1	0	1		ルビあるも不明
かたわ娘	1872（明治５）	ぢう	1	0	1	1	
文明論之概略	1875（明治８）	ルビなし	2	19	21	21	
民間経済録	1877（明治10）	ルビなし	0	7	7	7	
福澤文集	1878（明治11）	ルビなし	0	1	1	1	
通貨論	1878（明治11）	ちう	1	0	1	1	
通俗民權論	1878（明治11）	ルビなし	1	1	2	2	

書名	刊行年	表記	中	全	計	総	備　考
通俗国権論	1878（明治11）	ルビなし	1	0	1	1	
民情一新	1879（明治12）	ルビなし	0	8	8	8	
時事小言	1881（明治14）	ルビなし	4	7	11	11	
時事大勢論	1882（明治15）	ルビなし	0	1	1	1	
帝室論	1882（明治15）	ルビなし	1	1	2	2	
兵論	1882（明治15）	ルビなし	0	1	1	1	
全國徴兵論	1884（明治17）	ルビなし	0	2	2	2	
通俗外交論	1884（明治17）	ルビなし	0	1	1	1	
日本婦人論 後編	1885（明治18）	その他	1	0	1	1	ルビあるも不分明
士人處世論	1885（明治18）	ルビなし	0	1	1	1	
日本男子論	1888（明治21）	ルビなし	1	0	1	1	
尊王論	1888（明治21）	ちう	1	1	2	2	
国會の前途・国會難局の由来・治安小言・地租論	1892（明治25）	ちう	2	2	4	4	
實業論	1893（明治26）	ルビなし	3	0	3	3	
福翁百話	1897（明治30）	ちう	3	4	7	9	
		ルビなし	0	2	2		
福澤全集緒言	1897（明治30）	ちう	2	2	4	12	
		ぢう	1	2	3		
		ルビなし	1	4	5		
福澤先生浮世談	1898（明治31）	ちう	0	1	1	1	
福翁自傳	1899（明治32）	ちう	0	2	2	6	
		ぢう	2	2	4		
福翁百餘話	1901（明治34）	ちう	1	0	1	2	
		ルビなし	0	1	1		
明治十年丁丑公論・瘠　我慢之説	1901（明治34）	ルビなし	1	1	2	2	
全著作合計	1886～1901	ちう	23	27	50		
		ぢう	14	21	35		
		ルビなし	26	95	121		
		その他	5	2	7		
		合計	68	145	213		

福沢諭吉の著作には「セカイチュウ（世界中）」の語形と「世界の中」の意味が多数存在している。福沢以外の近代著作でも同様の傾向が見られる（表6参照）。また、「コクチュウ（国中）」が多数存在し「クニジュウ（国中）」が存在しないことを考慮すると「－ジュウ（中）」が「範囲全体」の意味だけに限定して使用されるようになったのは明治以降のことであると結論することが可能である。

表６　近代著作物における「世界中」の読みと意味　※「ジュウ」を●で示した。

出典 ＼ 語	成立年	世界中（ちゅう） 内	世界中（ちゅう） 全	世界中（じゅう） 内	世界中（じゅう） 全	世界中 内	世界中 全	国中（こくちゅう） 内	国中（こくちゅう） 全	国中（くにじゅう） 内	国中（くにじゅう） 全	備考
東江楼主人『珍奇物語』	1872	○		○								
福沢諭吉『西洋旅案内 巻之上 』	1873	○										
福沢諭吉『童蒙をしへ草．初編．二」』	1872										●	他著作は「国中」
青木輔清『万国奇談』1編	1873	○										
青木輔清『万国奇談』2編	1873					○						
三宅青軒『日の丸太郎:豪傑小説』	1873			○								「世界中の力」
東江学人『文明開化内外事情』	1873			○								
ヒロビブリアス『教育史．下 』	1873					○						
吉村明道『近世太平記．4篇』	1879							○				「国中の人民」
編輯人不詳『真書太閤記』	1882							○				「国中四方に別れ」
金子平吉『五体以呂波名頭字尽 』	1884			○								
下山忠行『今世開巻奇聞』	1887					○						
伴源平『頓慮策：開港智発』	1887				●							
不二良洞『善光寺如来伝記図絵』	1887							○				
神田民衛『前九年後三年日本外史衍義』	1887							○				
ゼー・エチ・デホレスト『精神的講話』	1892	○										
井上円了『漢字不可廃論』	1900					○						
平如石『財務漫録』	1902					○						
金森通倫『勤倹貯蓄実験談』	1903		●		●							
巌谷小波,金子紫草『少年世界読本』	1907				●							※第二巻
巌谷小波,金子紫草『少年世界物語』	1909				●							※第二巻
巌谷小波,金子紫草『少年世界物語』	1909			○								※第五巻
三好陣太郎『最近釧路国案内 』	1910					○						
文盛堂編輯所『世界発明譚』	1914	○										
宮地竹峯『地底探検:冒険奇談』	1917				●							
霜烏苣太郎『開南全書』	1919	○										目次1本文3
白井規一,島田牛稚『趣味の地理』	1919	○										
小谷節夫『何人も知らねばならぬ支那の智識』	1922		○		●							
鈴木梅四郎『躍進日本の新財　政経済策』	1922			○								
関口定伸『電気学講話:教育資料』	1923	○										
岡本瓊二『理化学界の不思議』1	1923			○								
大川俊一郎『如何にして彼等は富豪となりしか』	1925	○				○						
コナン・ドイル『没落の世界』	1925			○								
斎藤清太郎『西洋歴史物語．下』	1930			○								世界中の財宝
北原白秋『白秋童謡読本.尋4』	1934				●							
真田鶴松『国旗及祭日祝日の由来』	1935					○						
松本忠雄『支那事変と国際情勢』	1938						●					
大阪毎日新聞社『戦時経済早わかり』	1939	○										世界中は家内
山本祥吉『少年少女日本水産の話 』	1943						●					
上野浩一『枢軸必勝の布陣』	1943						●					世界中の大戦争

上記の他に「日本国中」の例として振り仮名がないため清濁は不明だが「範囲内」の意味を持つ例として次のものがある（近代デジタルライブラリーによる）。

井上因碩編輯（1875）『圍碁段附』「日本國中」

保田信親著（1881）『日本自慢. 2編』稽古堂「日本国中劇場一覧」

早川弘毅編（1883）『太閤記紫大徳寺焼香場』「日本国中大小名御供行列の事」

山口亀吉著（1888）『太閤記大徳寺焼香場』千松堂「日本国中大小名御供行列の事」

山川政蔵編（1891）『神道大祓大全』「日本国中一之宮神名」

菊池先生（1892）『著万福塵劫記』「日本国中男女之数積事」

高橋茂久平講述（1928）『御理解感話』「第三十六節（日本國中のあらゆる神を）」

吉田光由編（1935）『新編塵劫記. 下巻』古典数学書院「日本国中男女の数の事　付日本国中（米をつもる事　日大佛の堂へ米入るつもりの事）」

4.2 「チュウ（中）」と「ジュウ（中）」の歴史的変遷

これまでの考察をもとに「チュウ（中）」と「ジュウ（中）」の用法の時代的変遷についてまとめたのが表7である。

表7　「チュウ（中）」と「ジュウ（中）」の変遷

<table>
<tr><th>Ⅰ期（奈良～平安）</th><th>Ⅱ期（鎌倉～室町）</th><th>Ⅲ期（江戸～明治初）</th><th>Ⅳ期（明治中～現代）</th></tr>
<tr><td>a. 漢語【新濁】</td><td>a. 漢語【新濁】</td><td>a. 漢語【新濁】</td><td rowspan="3">a. 和語【範囲全体】
b. 漢語【範囲全体】
c. 漢語【元新濁】</td></tr>
<tr><td rowspan="3">b. 漢語</td><td>b. 漢語【新濁以外】</td><td>b. 漢語【新濁以外】</td></tr>
<tr><td>c. 和語</td><td>c. 和語</td></tr>
<tr><td></td><td>d. 漢語</td><td>d. 漢語【継続も】</td><td>d. 漢語【範囲内・継続】
e. 和語【範囲内・継続】</td></tr>
</table>

※表中のゴシック体は「ジュウ」、明朝体は「チュウ」を表す。

「京中」「国中」「世界中」などの語はすでにⅠ期から範囲内の意味だけではなく範囲全体の意味として使用されることがあった。

Ⅰ期　通常の字音形態素の時代（新濁のみ）

a. 京中・空中・心中・年中

b. 国中・海中…

Ⅱ期　接尾語「ジュウ」の成立

「範囲内」と「範囲全体」はⅡ期・Ⅲ期を通じて緩やかに進行していたと考えられるが明治初期においてなおその区別は厳密ではなかった。「チュウ（中）」「ジュウ（中）」は近代になってからそれぞれが独自の意味をもった接尾語として独立性を高め、その結果として現代におけるような多くの語に接続することが可能になったと考えられる。

a. 京中・空中・心中・年中

b. 御所中　※『平家物語』

c. 鎌倉中　※『曽我物語』

d. 国中（コクチュウ）

Ⅲ期　揺籃期

Ⅲ期には「逗留中」（井原西鶴）のようにサ変動詞に接続してその動作が継続していることを示す新しい用法も現れる。また、以下に示すように新濁形は健在（心中・分化年中）であり、「コクチュウ（国中）」は「国の中」「クニジュウ」の両方の意味を持つ。人に付く「ジュウ」は「僧中」のきように単に複数を表すようである。福沢諭吉の「世界中」は読みも意味も２系統が存在しているようである。

a. 空中・心中・山中・年中　※後に非連濁形へ転じる

b. 国中（コクチュウ／コクジュウ）・逗留中

c. 鎌倉中・島中・日中・月中・此中（コノジュウ）

d. 国中（コクチュウ／コクジュウ）・心中（シンジュウ）・世界中　逗留中

Ⅳ期　意義の分化と日本語の清濁

a. 国中（クニジュウ）・夏休み中

b. 世界中　すでに見たように「世界中」の語形が「セカイジュウ」、かつ意味が「世界全体」に固定するのは明治に入ってからである（表 5･表 6 を参照）。現代では「チュウ」＝範囲内、「ジュウ」＝範囲全体の結びつきがほとんど例外のないほどに強くなっているが、このような状態は歴史的には近代以降に起こった新しい変化である。同様に現代語では字音形態素「サン（山）」と「ザン（山）」は前者が固有名詞（山名）に後者が普通名詞に接続しており、語形の違いは文法的意味に関連していると考えられる。しかし「火山」「登山」は近代以降の諸資料においてなお「カサン」「トサン／トウサン」と読まれることが多いのである。

c. 心中（シンジュウ）・連中（レンジュウ）・講中（コウジュウ）

d. 心中（シンチュウ）・逗留中

e. 夏休み中　考え中

「範囲の中」と「範囲全体」は通常形と強調形の関係で両者は形態素頭の清濁を異にする二重形と見るべきである。これは語頭濁音語とその出自である語頭清音語の関係と等しい。たとえば「フレル（振れる）」と「ブレル（振れる）」・「サマ（様）」と「ザマ（様）」、オノマトペには一般的な清濁の対立である「コロコロ」と「ゴロゴロ」・「サラサラ」と「ザラザラ」などをその例にあげることができる。また語頭の対立ではない特殊な例として「アフレル（溢れる）」「アブレル」、「ニワ（庭）」と「バ（場）」なども存在する。

4.3 「現代仮名遣い」における「世界中」の表記

1946年制定の「現代かなづかい」ではそれまで歴史的仮名遣いで「ぢ」「づ」と表記されていた語が原則として「じ」「ず」と表記されるようになった。これは近世以降同音になっていた四つ仮名のうちの「じ」「ぢ」と「ず」「づ」の書き分けを廃止したための変更である。ただし「チヂム（縮）」「ツヅク（続）」のような「同音の連呼」と「鼻血」「ソコヂカラ（底力）」のような「二語の連合」による濁音は「ぢ」「づ」の仮名で表記するとされた。1986年制定の「現代仮名遣い」では原則は変わらないが「セカイジュウ（世界中）」「ユウズウ（融通）」「イナヅマ（稲妻）」などの語例が示され、それらの語については「ぢ」「づ」で書くことも「許容」されることになった。この間の事情をよく説明している武部良明（1991）を以下に引用する。

一方で「修理中」が「修理ちゅう」であるにもかかわらず、「世界中」のほうは、「世界ぢゅう」ではなく、「世界じゅう」である。現行の告示「現代仮名遣い」では、「ぢ・づ」を扱った特例５のなお書きに「世界じゅう（世界中）」の形で例示されている。

この場合、接尾語としての「中」は、清音で読む場合と濁音で読む場合とを分けて考えることが必要である。「－中」は、内側の意味で「空気中」、行われている途中の意味で「修理中」、期間の意味で「今週中」などとなる。こういう意味でも一いる場合はすべて清音の〔チュ－〕であって濁音にはならない。それに対してある範囲全体の意味で「世界中・家内中・一年中」などの用い方があり、常に濁音で〔ジュ－〕と読まれている。したがって、本来〔チュ－〕と読む接尾語が複合語の後半部となるときに濁音化すると考えることはできない。現代仮名遣いで「ちゅう」と書く接尾語と「じゅう」と書く接尾語とは、同じ「中」を用いても、全く別のものなのである。

このことについて、国語審議会「正書法について」では、次のような説明が行われている。それは、「いっぱいの意味を添える接尾語」としての「中」は常に濁音で発音されるとともに、「－のなか」という本来の意味から離れて別の意味になっている、という。その点を重視して、これを「-ちゅう」とは別の意味の接尾語として扱い、その現代仮名遣いには原則を適用して「-じゅう」とする、というのがその内容である。つまり、漢字で「-中」と書く接尾語に二種類あって、清音で読むときと濁音で読むときとは、全く別のものとして扱うことになる。それは、本来は清音で読む語の構成要素が二語の連合によって濁音になったのではない、という考え方に基づくのである。ただし、「中」という漢字そのものが、いっぱいの意味のときに常に濁音で読まれるということではない。「いつも」の意味で「二六時中」または「四六時中」という四字漢語があり、それぞれ一日じゅうの意味で用いられている。しかし、「二六時中・四六時中」は「中」の読み方が清音であり、現代仮名遣いも当然「ちゅう」である。

関連して、漢字熟語の「中」という漢字の読み方を取り上げると、次のようになる。まず中ほどの意味で用いる場合は「中位・中途・中の成績」などいずれも清音の「ちゅう」である。「中学・中央・中継・中庸」など、語頭に来るものはすべて「ちゅう」である。これに対して語頭以外

では、清音の場合と濁音の場合がある。「懐中・車中・空中」は清音であるが、神仏にお参りする仲間の「講中」は濁音である。そうしてこういうときの現代仮名遣いは、「ぢゅう」ではなく、「じゅう」のほうである。

それならば、「連中・心中」はどうか。同じ仲間を「連中」というときは「れんちゅう」であり、心の中の「心中」は「しんちゅう」である。つまり「中」という漢字の本来の字音は「ちゅう」であっても、漢字熟語の後半で濁音化するのは「じゅう」である。その理由は、現代仮名遣いで「ぢ」を用いるのが「ちぢみ」のような同音の連呼と「はなぢ」のような二語の連合に限られていて、そのどちらにも該当しないからである。

2010年に公布された「改訂常用漢字表」では「中」の字の音訓に「ジュウ」が追加された。これは「現代仮名遣い」で「せかいじゅう」と表記された語を「世界中」と漢字表記することに理論的根拠を与えるための措置と考えられる。

以下に掲げるのは「第２７回国語分科会漢字小委員会・議事録」である（インターネット上に公開されたものによる）。この議事録から「世界中」を「せかいじゅう」と表記すること、また「せかいじゅう」を「世界じゅう」ではなく「世界中」と表記することについて長期にわたり多くの議論が積み重ねられてきたことを知ることができるので、その資料的価値の高さに鑑み、長くなるが該当部分の全てを以下に引用する（http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/bunkasingi/kanji_27/pdf/gijiroku.pdf）。

◎第27回国語分科会漢字小委員会・議事録　平成20年11月11日（火）

〔出席者〕（委員）前田主査，林副主査，阿辻，甲斐，金武，杉戸，武元，出久根，納屋，濵田，邑上各委員（計11名）

（文部科学省・文化庁）匂坂国語課長，氏原主任国語調査官ほか関係官　（中略）

7 質疑応答及び意見交換における各委員の意見は次のとおりである。（中略）

○武元委員

「世界中」の件です。よく書くときに迷うもので，「し」に濁点（じ）が本則になっているわけですけれども，現代仮名遣いで，２語に分解しにくいものとしてとらえるということを言っていて，「ジュウ」を認めるということは，これやはり２語連合だということを認めてしまうことになるんじゃないかと思うんです。つまり，両者で矛盾が生じるような気がしてならないんですけれども，その辺はどのような説明が成り立つんでしょうか。

○氏原主任国語調査官

それは「ジュウ」という音を認めるから，「世界」に「中」が付いたんだというふうに解釈されるようになるということですか。

○武元委員

いいえ。「し」に濁点（じ）の「ジュウ」を認めて，「世界」＋「中」でも，「国」＋「中」で

もいいですけれども，そこにそれが付いているということは，その二つの言葉が合わさって２語連合というふうにとれてしまうような気がするんです。

○氏原主任国語調査官

昭和21年の「現代かなづかい」のころから，これはずっと問題になっていたことの一つなんです。要するに四つ仮名，「じ・ぢ」「ず・づ」の問題ですけれども，ある時期に，正書法というような考え方を国語審議会が持ち込んで，現代の意識で２語に分解できるかどうかということで判断するとしたわけです。「世界中」については，その時にこういう説明をしています。この「世界中」は，二つの言葉が合わさったのではなくて，「中」は接尾語なんだと。要するに，ある語の後ろに付いて一つの語を作るための，その構成要素として働いているんだということです。そういうような説明をしていて，例えば，「三日月」なんかですと，「三日」という言葉と，「月」という言葉が対等の関係でつながりますけれども，「世界中」の場合の「中」は，接尾語としてある範囲全体を表す意味を添えるということで，必ず何かの後ろにくっ付く語だということです。「クラス中」だとか「日本中」だとかも同じです。確かに接尾語だといっても，もちろんくっ付く本体があるわけですから，2語と考えることもできますよね。でも，語としては「世界中」で１語なんだ，「中」は接尾語だから，2語の連合ではないんだという，かなり苦しい説明ですけれども，そういう説明をしてきているんです。ですから，今のまま「し」に濁点（じ）の「ジュウ」を認めないと，「世界中」という語を「じ」で書くことにどうしても無理がある。漢字ワーキンググループで話題になったのは，今おっしゃったようなこともあるんですけれども，認めないと，何でこれが表内音なのかが分からないということです。国語辞典などでは，さっき金武委員が，全く一致していて揺れがないから問題ないということをおっしゃったんですけれども，人によってはこれは表外音なんだから，本当は仮名書き（世界じゅう）でなければいけないんだという人もいるんです。そういうような疑問が一部に生じているということも考え合わせると，「ジュウ」というのを認めた方が分かりやすいだろうというのが漢字ワーキンググループとしての判断です。これまでのいろいろな経緯を踏まえて現実的に考えていくと，「中」に「ジュウ」という音を認めて，表内音と位置付けた方が混乱がないのかなというのが，漢字ワーキンググループの考え方です。

○武元委員

加えることに反対はしないんですけれども，ここの現代仮名遣いの，この説明とどうも矛盾するような気がしてならないということです。

○林副主査

この「世界中」というのは，明らかに連濁というか，「チュウ」が濁ったのが「せかいじゅう」ですから，そういうふうに前とくっ付いて濁った場合には，もとの仮名に濁点が付くという原則から言うと，これは「ち」に濁点であるべきだと…。字音仮名遣いから言うと，明らかにそうなんです。ところが，これは2語に分解できないと言って，非常に目立つところに例として挙げちゃったものですから，既にこれが定着しているというところから，「し」に濁点（じ）

の「ジュウ」を認めないと，これと矛盾しちゃうという，かなり苦しい，つまりこんな例を出してもらったために，非常に苦しい説明をしながら，そういう措置をせざるを得ないというのが現実だと解釈しております。

○前田主査

かなり現実を尊重していこうということですね。

○氏原主任国語調査官

この国語分科会は，国語審議会の後を受け継いでいるところですので，お手元の『国語関係答申・建議集』の154ページの下から４行目を御覧ください。そこに，今の問題が出ています。これは，さっき申し上げた，全体としては「正書法について」という報告なんですが，154ページの下から4行目に,「「現代かなづかい」の2語の連合における連濁の「ぢ」「づ」の書き方は，語の構成意識をかなづかいの上に表わしたものであるが，しかし，2語とは「ぢ」「づ」に始まる語の語意識によって前後の部分が二つの部分からできている意識のあるなしによって決まると考えられる。その意識は,後半を漢字で書く際の書き方,後半の語を含む語群との連想，その語と派生関係にあると思われる語との連想がささえとなる。もっとも,これらのうち,「家中」「一日中」の「～中」などは,「～じゅう」とすることに多少問題はあるが，…」と問題のあることを認めています。続きには,「多少問題はあるが,しかし,ジュウと発音するものの中に「ぢゅう」と書かなければならない語がないから,「じ」と書いてもよいことになる。」とあります。この辺りにもちょっと飛躍がありますよね。「のみならず,「家中」「一日中」の「～中」は,いっぱいの意味を添える接尾辞に転じて，語原とは離れているから，語原によらず「じゅう」と書いてもさしつかえない（3)。」と続きます。これを読んで，なるほどと思うかどうかは別ですけれども，こういう説明の仕方でずっと流れてきています。ですから，その辺りが非常に苦しいところであるということです。

○前田主査

これは昭和31年に出た「正書法について（報告)」なんですでわざわざこういうふうな説明をしているというのは，その時も非常に問題になったことですが，一応こういう形の，この正書法の決まりがそのまま訂正されないで，今まで来ているわけです。ですから，これを変える大きな理由があって，変えられれば，その段階からこちらの方もそれに従って変えることできるかと思いますけれども，こちらの方を先立って変えると，今度は前の正書法の書き方に訂正を申し入れなきゃならないというふうなことになってきますので，そこまでの段階にはまだ至っていないかなと思うんです。これも現実に慣れ過ぎている感じもしないわけでもないんですが，そういうふうな判断ということになりますね。説明自体には異論があって当然だとは思うんですけれども。そのほか，何かございましょうか。もしよろしければ，なお多少考えるべき余地があるかと思いますけれども，おおむねこの配布資料３の形でお認めいただいて，また検討させていただくということでよろしいでしょうか。（→漢字小委員会了承。）

接尾語「ジュウ（中）」の出自は「チュウ（中）」連濁形であるところは動かぬことであり、かつ意味的には「ジュウ（中）」は「チュウ（中）」の強調形といいうる。このように「ジュウ（中）」と「チュウ（中）」とはお互いに二重語形を形成しており、そのことが独立した接尾辞を形成した今もなお両者の結びつきを強めている理由といえよう。

5.　おわりに

近世以降「講中」「心中」「連中」などが「～の中」の意味を失って特別な意味に転じたことにより「クウジュウ（空中）」などの新濁形が使用されなくなった。この変化が完了したことにより、「チュウ（中）」と「範囲内」、「ジュウ（中）」と「範囲全体」の意味が排他的に結合することになったと考えられる。

「ジュウ（中）」が接続する条件を古いものから順にあげると以下のようになる。

A　前部成素末が鼻音　例：空中・光中・心中

B　場所を意味する語（「京中」からの類推か）　島（しま）中・鎌倉中

　　時（期間）を意味する語　日（ひ）中・月（つき）中・此（この）中・国（こく）中

C　特定の意味を持つ語　心中・講中・年中

D　範囲全体の意味　国（くに）中・世界中

太田晶二郎（1954）によれば地名「府中」はかつて「ふぢう」と読まれた証拠があり、場所を表す語に接続する「中」は現代以上に「ジュウ」と発音されることがあったのかもしれない。また、明治期以降Aの連濁形（新濁形）が非連濁形に代わっている例が多い（たとえば「空中」「連中」など）。現代においても若年層で「三階」「行水」などの語が非連濁形で発音される変化が起こりつつあり、字音系接尾辞（二字漢語の後部成素）の非連濁化現象は今なお継続していると考えられる。このことの理由については別途考えてみたい。

「チュウ（中）」の場合、Cの増加とDの用法の広がりによって、Aで生じた新濁形が非連濁形へ転じて（たとえば「クウジュウ（空中）」から「クウチュウ（空中）」へ）現在のような単純な対立となった。その後も「コクチュウ（国中）」から「クニジュウ（国中）」、「タイジュウ（体中）」から「カラダジュウ（体中）」などの変化が生じた。「範囲内」を表す「チュウ（中）」に対して「範囲全体」の意味を表す「ジュウ」はその成立が新しいにもかかわらず以下の理由でその勢力を広げている。

(1) 範囲内：範囲全体は明確な意味の対立をなす。

(2) 濁音形は清音形の強調形であり、一種の「語頭濁音語」と考えられる。

(3)「チュウ（中）」省略できるが（たとえば「教室中の机」は「教室の机」）「ジュウ（中）」は省略できない

(4)「ジュウ（中）」を言い換えると長くなる「教室内のすべての机」

(5) 語種による制約がない（「チュウ（中）」は和語に接続できない場合が多い）。

文献

ウィンター（山崎）良子（1973）「中（ちゅう）と中（ぢゅう）の使い分けについて」『立教大学日本文学』30

太田晶二郎（1954）「ふじう」『日本歴史』第 73 号　※太田晶二郎（1992）『太田晶二郎著作集　第三冊』吉川弘文館に再録

奥村三雄（1952）「字音の連濁について」『国語国文』21-5　京都大学国文学会

大和田栄（1997）「接尾辞「－中」とその造語性」『東京成徳短期大学紀要』30

柏野健次（1979）「「故障中」の意味論—造語意識とアスペクト—」『大阪樟蔭女子大学論集』16　大阪樟蔭女子大学学術研究委員会

小林芳規（1970）「院政・鎌倉時代における字音の連濁について」『広島大学文学部紀要』29-1

小柳昇（2010）「『〈時名詞〉+ 中（チュウ）』と『〈時名詞〉+ 中（ジュウ）』の使い分け—日本人は〈トキ〉をどのように捉えて言語化しているか—」『平成 20 年度奨学論文入選作品集』拓殖大学研究所

鈴木豊（2013）「字音形態素「サン（山）」を後部成素とする派生語の連濁について」『文京学院大学外国語学部文京学院大学短期大学紀要』12

武部良明（1991）「「世界じゅう」と「修理ちゅう」」『なるほど現代表記法』日本評論社

丹保健一（2001）「現代日本語における漢語系接尾辞「～中（チュウ）」「～中（ジュウ）」の使い分けをめぐって」『国語語彙史の研究』20　和泉書院

丹保健一（2002）「接辞的造語成分「中（チュウ）」「中（ジュウ）」についての覚え書き—「午前ちゅう」「午後じゅう」「夏じゅう」「冬じゅう」を中心に—」『論究 10　現代日本語の文法研究』明治書院

福永静哉（1955）「音読漢文における連濁の法則」『女子大国文』10　京都女子大学

福永静哉（1959）「同一経典における字音連濁現象の変遷」『女子大国文』13　京都女子大学

文慶喆（2000）「「漢語語基＋中」の構成と意味」『言語科学論集』4　東北大学

水野善道（1984）「漢語の接尾的要素「～中」について」『日本語学』3-8 明治書院

山田潔編（1998）『邦訳日葡辞書逆引索引』笠間索引叢刊 118

吉田奈保（1994）「「今週中」と「今日中」—日本語教育における「中」の用法をめぐって—」『沖縄大学紀要』11

（2013.11.29 受稿，2014 年 .1.15 受理）